

申請者	学科名	造形デザイン学科	職名	教授	氏名	助川 たかね
調査研究課題	必然性から生まれる独創性とその表現手段としてのドローイングの研究					
調査研究組織	氏名	所属・職		専門分野	役割分担	
	代表	助川たかね	造形デザイン学科 教授	経営戦略 都市計画・ デザイン	全体計画管理・実施	
	分担者					
調査研究実績の概要	<p><b>研究の学術的背景</b>                  芸術教育と異なり、実社会との関係性が強いデザイン教育の扱う範囲は多岐にわたるうえ、近年の技術革新によってこれまで「アイデア」に留まっていたものを具現化する技術は急速に進歩している。都市デザインや建築、工業製品などに求められる独創性はそれを実現可能にしまった技術ゆえに「アイデア／イメージ」の域に留めることはできなくなっている。そこで、現代におけるデザインの「独創性」とは何であるのか検証し、本学の教育改革に反映させることは喫緊の課題である。</p> <p><b>本調査研究の目的</b>                  本研究の第1の目的は、先行研究における「ザハ・ハディド (Zaha Hadid) 建築のプロセス・マネジメント」から抽出された事実に基づき、デザイン領域における「独創性」はそれが使われる場所と機会を文脈として必然的に生まれるものであるという仮説を立てたうえで実証することである。そして、その研究結果が仮説を裏付けるものであるか否かに関わらず、技術革新が変化させているデザインの「創造性」とそれに対応できる教育改革の提言につなげることを第2の目的としている。</p> <p><b>先行研究</b>                  本研究に着目したのは、自身の先行研究において、かつてはその複雑さ故に「Unbuilt (建てられない) 建築家」と呼ばれていたハディドのアイデアが技術革新により凄まじい勢いで実現している事実を調査している過程で出会ったドローイングにある。三次元の物体を設計・表現する手段として使う平面図・立面図・断面図・模型といった手段に加え作品の思想と構造を二次元で表現するハディド特有のドローイングを見続けたとき、作品間の類似性がない「独創性」に気付かされた。また外観の複雑さや斬新さとその実現手段を研究対象としているなかで、内部空間の快適性にも驚かされた。「Built (建てられる) 建築家」となったハディド作品の現物とドローイングを検証するなかで、「自身の生い立ちや思想」よりもむしろ「使われる場所と機会 (ハディドは家具や服飾デザインも手掛ける) を文脈として創出する独創性」という仮説が浮かび、従来の建築家にはないその表現手段にも着目した。ハディドの必然的独創性とその表現としてのドローイングの関係について、先行研究は発表されていない。</p>					

<p>調査の実績 の概要</p>	<p><b>期待される成果</b></p> <p>世界的建築家ザハ・ハディドが描く超複雑な建築及びランドスケープの実現には、クライアント、設計・施工過程の革新、世界各国の専門家、法律や行政の壁、予算と時間など通常の建築プロジェクトより遥かに複雑かつ国際的な組織のマネジメントが要求されるのは周知であるが、もはや実現不可能なものではない。改めてその設計図とドローイングを検証することで今回の仮説を実証できたとすれば、デザイン教育のひとつの軸を見出すことができる。建築・都市作品の場合、土地が持つ文脈やエネルギーの流れ方、人々の動きなど複雑な要素を作品に束ねて行く過程で「必然的に」この場所でこう使われる建築であればこういう形になるのだということをクライアントや関係者に理解してもらうためにハディドがドローイングを使い、「必然性から生まれる創造性」の表現を可能にしていたとすれば、本研究で蓄積・分析されたデータベースは教育手法やカリキュラム改革に資するものと期待できる。</p> <p><b>現地調査による検証</b></p> <p>ハディドの実現第一作である「ヴィトラ消防署」は、ドイツ、ヴァイル・アム・ラインに広大な社屋を持つヴィトラ社に現存する。ハディドのドローイングが、実際に建設された建築作品の生み出す思想・機能・意匠をどのように表現しているのか、ヴィトラ社学芸員と共に検証した。絵画的とも言える彼女のドローイングには曲線の重なりと流れ、そこからつくられる室内外の空間の広がり、まさに予言したかのように展開されていた。国立競技場で注目されたハディドだが、その形は「必然」から生まれた独創性を持つのか、日本での議論が本格化し学生が共に考えてくれることを願う。</p> 
<p>成果資料目録</p>	<p>特になし</p>